

高岡の図書館

第106号

2020. 9. 1

編集・発行 高岡市立中央図書館（〒933-0023 富山県高岡市末広町1-7） TEL 0766 (20) 1818 FAX 0766 (20) 1819

全ての子どもにかけがえのない読書体験を

高岡市立中央図書館 館長 牧 てるよ

生涯本を友とする人たちは、早い遅いはあるにせよ、読書生活の始まりとなるよき出会いがあったにちがいない。幼い頃から読み聞かせをしてもらい、いつも本のある環境で育った子どもたちは、人生の早い段階で尊い宝物をもらったと言ってもよいだろう。しかし、現実には、そうした機会になかなか巡り会えない子どもたちも少なくない。

私が「本」と出会ったのは、小学校6年生の時だった。ある日の授業で、「お薦めの本」として50冊の名作リストが配られた。初めは、全部読破したいという一心で読み始めたが、次第に前のめりになっていった。中でも、平和をテーマとする『太陽の子』との出会いは衝撃的で、「生きる意味」「真のやさしさ、強さ」などについて、初めて真剣に向き合うこととなった。人生の羅針盤ともなる本と出会い、多感な時期にその根っこをしっかりと植え付けてくださった師に、今も感謝の念が尽きない。

教員時代は、「どの子にも読書に親しむ機会を与え、自分らしく生き抜くための糧とさせたい」という願いをもって授業に臨んだ。それは、教育者としての責務でもあったと考えたからだ。教科・領域の目標に照らし、それぞれの特質に合うように読書活動を取り入れた。例えば、理科や社会科では、抱いた疑問や学習課題を解決するために読む、国語科では、著者の生い立ちを知り作品をより深く読むために、同じ著者の他の作品を読むなど、課題解決型の読書が挙げられる。

子どもたちが自ら本を手にしたくなるような学習を工夫することで、物事を多面的に捉え、多様な視点から考える力が育つ。更に、考えを交流する学習によって、言葉に対する感覚を磨き、互いの立場を尊重し合うなど、人として大切なことにも気付くであろう。そのための授業

づくりを推進してきたつもりである。知識の獲得、思考力・判断力・表現力等の育成だけでなく、人格形成においても少なからぬ成果が期待できるのは、読書を核とする学び合いによるものである。

先を見通すことのできない不確実な時代に突入し、自分の内面を見つめることが求められる今、どの子にも等しく保障されている学校教育の中で、一人一人がかけがえのない読書体験をすることの大切さを改めて痛感している。

折しも、小学校では今年度から新学習指導要領が施行され、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の中で、学校図書館を生かすことが明記された。多くの授業で、学校図書館を活用しておられると思うが、学校図書館だけで対応しきれない課題も多いのではないだろうか。そのような時は、是非とも公立図書館に声をかけていただきたい。約40万冊もの蔵書がある中央図書館には、古文書や郷土資料、創刊当初からの新聞、各種雑誌等、学校にはない貴重な資料やレファレンス体制が整っている。必要な図書・資料の選書や様々な要望に適切、迅速に対応できると考えている。

さらに今年度は、「学校訪問・図書館招待事業」「ふるさと高岡巡回文庫」等、学校と連携した新規事業を実施している。また、子どもたちが学校で中央図書館の本を借りられるシステムを構築するなど、日常的な学びのサポート体制を整えているところである。このような事業を活用していただき、時には、情報センターの機能を備えた教室や研修室として本館を使っていいただければと思う。

本を友とし、豊かな心と知性をもった子どもを育てることは、市民創造都市高岡の頼もしい担い手を育てることに通じると確信している。

地名を意識するきっかけに

— 高岡における平成の大合併と旧町名復活から

日本地名研究所理事（元高岡市万葉歴史館研究員） 中葉 博文

（一）

地名とは「二人以上の人の間に使用せられる符号である。」と、民俗学者柳田国男が著書『地名の研究』で述べているように、地名は一つの社会の中で、その場所やその土地に付けられたものである。地名は、単なる符号ではなく命名した人間の思考や感情そして心理状態をも込めたものである。

つまり、地名はそこで生活する人々の文化そのもので、加えて無形の文化財的価値の極めて高い存在である。

また、地名は時代の変遷とともに地名の生活圏の拡大・縮小や社会構造の変化によって、命名された地名が消滅したり、改称せざるを得ないことも発生する。一方、地名は地域の気運や自治体の「まちづくり」構想と連携して、旧地名・町名の復活や保存・継承などに発展することもある。

普段、地名は空気のような身近な存在なので、あまり意識しない。しかし、多くの人たちが、地名を意識するのは、地名が改変・消滅した時や新地名が誕生した時など、「地名」が変化した時である。

近年、高岡市で多くの人たちが「地名」を強く意識した時は、「平成の大合併」によって、現在の高岡市が誕生した時や市街地で二つの旧町名が復活した時が、そうではなかったろうか。

（二）

現在の高岡市は、平成 17 年 11 月 1 日、旧高岡市と旧西砺波郡福岡町の一市一町が新設合併して誕生した市である。

旧高岡市とは、明治 22 年、当時の明治政府が、地方自治制度樹立のために施行した「市制・町村制」による俗にいう「明治の大合併」によって、かつての射水郡高岡町や 90 の村が伏木町や太田・二上・能町・守山など 12 ヶ村となり、同じく砺波郡内の 104 ヶ村が戸出・中田の両町と般若野・北般若・醍醐・立野など 10 ヶ村に編入され、大正期に入って同 6 年 5 月 15 日、旧高岡市は掛開発村を、同 14 年 8 月 1 日には下関村を。そして、昭和期では、同 3 年 6 月 1 日横田・西条の両村を、同 8 年 8 月 1 日二上村、同 17 年 4 月 1 日には伏木町及び守山・能町・野村・二塚・佐野の五ヶ村を、また同年 10 月 2 日には新湊町を編入した（新湊町は昭和 26 年 3 月 15 日高岡市より分離し市制施行し、現在は射水市の一部である。）。

旧高岡市は、戦後の同 28 年から施行された「町村合併推進法」により同年 10 月 5 日に太田・石堤・

東五位の 3 ヶ村、同 29 年 4 月 1 日に小勢村、同 30 年 4 月 1 日には立野村を編入した。また、同 29 年 4 月 1 日には、後に旧高岡市となる中田町は般若野村を、戸出町は北般若・醍醐・是戸の 3 ヶ村と合併した。同 28 年施行の「町村合併推進法」と、同 31 年から施行された「町村合併建設推進法」による、いわゆる「昭和の大合併」によって、全国的にも多くの市町村で合併が行われた。

高岡の地においても、同 41 年 2 月 10 日には中田・戸出の両町も旧高岡市に編入され、平成 17 年 11 月 1 日に旧福岡町と新設合併するまでの市域であった。

そもそも高岡の地名由来とは、慶長 14 年、「せきの（関野）」の台地のこの地に、高岡城と城下町を建設するのを契機に、前田利長がこの地「せきの」の名を「たかおか」に改称したことにあるといわれている。命名にあたっては、当時のこの地の形状（せきの…狭い野の意）が命名要因となり、さらに「せきの」と同意で、しかも瑞祥的地名ならなお良いという思いから、中国の『詩経』に載る「鳳凰鳴矣于被高岡」の「高岡（たかおか）」が、「せきの」の意を十分に反映し、さらに瑞祥的意も含んだ大変良い地名であるということから命名されたともいわれている。「たかおか」の管見は、同 14 年 6 月 9 日利長が、山崎長門に宛てた書状に「高おか」が最初だといわれている。また、漢字表記については、初めは「高岳」と表記し、後に今日の「高岡」と改字されたといわれている。

旧福岡町は、旧高岡市と同様、明治 22 年 4 月 1 日の「市制・町村制」の施行により、砺波郡福岡町として成立した。その後、旧福岡町は同 29 年 4 月 1 日西砺波郡に移管され、昭和に入り同 15 年 2 月 11 日山王村・大滝村を、同 29 年 8 月 11 日五位山村・西五位村を、同年 9 月 15 日には赤丸村を編入して旧同町の町域であった。平成に入って同 17 年 11 月 1 日、旧福岡町は旧高岡市と新設合併し、現在の高岡市の一部となった。同町の福岡の地名由来は、『富山県町村合併誌』（下巻）に「加賀国石川郡福岡村（かつての石川県河内村）の土豪結城七郎が当地内の大野に土着、のち結城氏の古屋敷地に町立てしたことにゆらいずという。」と記す。

新市名が誕生するに当たっては、旧高岡市と旧福岡町のそれぞれの地元での声を踏まえ、そして各方面からの意見も聞き、最終的に現在の高岡市が誕生したのである。現在、高岡の市街地を流れ

る千保川に架かる鳳鳴橋には、高岡市が建立した高岡の地名由来を記す刻字板がある【写真1】。



【写真1】
高岡の地名由来刻字板 昭和59年建立 高岡市

(三)

国は、昭和37年「住居表示に関する法律」を公布施行して、全国の市街地を対象として、地名改変を許容・奨励した。これによって、由来も由緒も、伝統も親しみもすべて無視して当用漢字を杓子定規に当てはめた地名や町名が全国に多く誕生した。旧高岡市においては、同40年度から住居表示整備に着手し、歴史上、近世の高岡町から続く由緒ある町名や、特に著名で一般に深く親しまれている町名は、そのまま採用されたが、語調のよいもの、まぎらわしい類似のもの、字名は使用されなかった。さらに名称は冗長なものが努めて整理された。そして、新たに町名を命名する場合は、できるだけ当用漢字を用い、簡明にということから、やはり、多くの全国の対象地と同様に由緒ある町名がこの時少なからず改変・消滅した。

平成に入って、現在の高岡市になった平成17年の翌18年、当時、高岡商工会議所が中心となり、「近世高岡の文化遺産群」を世界遺産にと一大市民運動が巻き起こり、結局は遺産登録には至らなかったが、同21年の高岡開町四百年祭が市民総ぐるみで盛り上がり、同23年には、高岡の歴史的風致を活かしたまちづくりへの機運が認められ、高岡市は「歴史都市」に認定された。これを契機に、同24年、また同会議所が中心となり旧町名復活と歴史都市高岡のまちづくりとリンクした運動が起きた。当面、旧町名復活を目指す対象地域は、江戸期に成立した高岡町で、昭和40年から実施した「住居表示に関する法律」により町名が変更された町に限定した。平成24年12月高岡商工会議所の「高岡の旧町名復活を推進する会」と復活に積極的な4自治会（平米町・坂下町・袋町・地子木



【写真2】
平米町の石標
平成27年建立 高岡市

町）が、円滑に町名変更となるよう支援を求める要望書を高岡市に提出し、同27年4月2日、「平米町」（前町名・本町【写真2】）、「袋町」（同・大町）の旧町名が復活し、江戸期の町名が復活するのは、県内初の快挙であった。

(四)

しかも、ただ単に、町名が復活したのではなく、それぞれ復活した町に高岡市は石標を建立した。現在、伏木地区にも赤の御影石で地名の由来を刻む石標や【写真3】のような石標が幾基も建立されている。この石標は、同地区の歴史・文化について考える伏木文化会によるものである。平成15年12月、会長の大黒幸雄氏に同地区での石標設置について伺ったことがある。大黒氏は、「地名や由緒ある旧町名を知ること



【写真3】
旧新町の石標
平成19年建立
伏木文化会

ことで地元への愛着を深めてもらおう。」また「石標を見た若者が、お年寄りへ昔の話を聞きに行くということもあるそうです。そして、地名・町名は過去を語る大切な無形の文化財ですよ。石標が次世代にしっかりと伝える架け橋になれば…」と話されたことが、とても懐かしい。

地名を研究する一学徒として、高岡市が鳳凰橋に刻字する高岡の地名由来刻字板同様、旧町名が復活した二つの町に石標を設置したことは嬉しい限りである。

昨今は、新型コロナ感染拡大により、地域のコミュニティ活動は希薄になっている。いずれ、この新型コロナも落ち着き、地域のコミュニティ活動も本格的に再開するだろう。

この再開を好機ととらえ、地域のコミュニティ活動を再生する話題の一つとして、各地域の歴史文化を物語る地元の地名・町名を意識することも良いのではなかろうか。

<参考文献>

- ・二上山総合調査研究会『二上山研究』第5号
中葉博文「二上山の新住居地名－伏木地区を例に－」2008
- ・中葉博文『越中富山地名伝承論』「近世高岡城と高岡・高岡町の由来」「平成の大合併と富山県の市町村名」 クレス出版 2009
- ・日本地名研究所編/発行『地名と風土』晒谷和子
「越中高岡町の町名由来と高岡市」2020

ふるさと情報コーナー

高岡関係資料情報

平成 30 年度に発行された図書、雑誌及び新聞に掲載された高岡関係資料のうち、図書館で把握できた文献の一部を紹介いたします。配列はおおむね富山県郷土資料分類表に準じ、論題名・執筆者名（敬称略）・資料名・巻号数・出版年月の順に記載しました。

特別展 古写真にみる高岡 (高岡市立博物館編刊 平成 30 年 6 月)

勝興寺展 本坊一般公開記念 (高岡市美術館編刊 平成 30 年 7 月)

城端線 120 年記念事業報告書 過去、現在、そして未来へ
(城端線 120 年記念事業実行委員会編刊 平成 30 年 7 月)

黒烏太郎と紅葉姫 ― 力尽き再開できず ―
(読もう とやまの民話 北日本新聞社読者局読者事業部ジュニア新聞担当取材編集
森みちこ挿絵 北日本新聞社刊 平成 30 年 8 月)

棟方志功の福光時代 信仰と美の出会い
(棟方志功作 石井頼子〔ほか〕編著 青幻舎プロモーション刊 平成 30 年 8 月)

獅子舞MAP 富山県高岡市福田・佐野・二塚
(福田・佐野・二塚地区公民館連絡協議会編刊 平成 30 年 9 月)

戸出によつといで vol. 2 古代～近代戸出の謎を解きつくせ
(地域の文化遺産継承事業実行委員会編刊 平成 30 年 10 月)

明治の富山 礎を築いた人びと (富山県公文書館編刊 平成 30 年 10 月)

前田利長 (見瀬和雄著 吉川弘文館刊 平成 30 年 11 月)

鉄道で名言巡礼 心に響くあの言葉が“旅”へ誘う 古今の名言の背景を訪ねて
(旅行読売出版社刊 平成 30 年 12 月)

とやまの曳山 富山県の築山・曳山・行燈行事
(とやまの文化遺産魅力発信事業実行委員会編刊 平成 30 年 12 月)

川（水辺）のすこやかさ調べ 2018 年（平成 30 年）

川（水辺）へ行ってみよう！ 高岡市立中田小学校編 (環の会執筆刊 平成 31 年 2 月)

都萬麻Ⅱ 02 高岡芸術文化都市構想
(島添貴美子企画編集 富山大学芸術文化学部刊 平成 31 年 3 月)

郷友随想 高岡市山町界隈 太田久夫執筆 (富山県人 1258 号 平成 30 年 8 月)

伝承を訪ねて 第 71 回 瑞龍寺を、源流からたどる小旅行 樽谷雅好執筆
(VITA 114 号 平成 30 年 9 月)

とやまの公園 空中散歩 中田中央公園（高岡市常国） (北日本新聞 平成 30 年 5 月 8 日)

追想ありし日 元中田商工会長 吉田一郎さん (北日本新聞 平成 30 年 9 月 3 日)

ビオトープ私たちの宝 高岡 中田小に完成 記念植樹も (北日本新聞 平成 30 年 11 月 10 日)

大力エデ後世へ継承 高岡・運源寺の元県天然記念物 苗木すくすく
保存会境内で育てる「再び中田のシンボルに」 (富山新聞 平成 31 年 2 月 24 日)

富山県立図書館ホームページ「とやまの本」及び「県内記事情報検索」より

||||| 調査相談の窓口から |||||

…… おたずねくださいQ&A (伏木図書館) ……

図書館では、利用者の皆さまから寄せられる様々な質問や相談に対して回答したり、解決のための資料を紹介したりしています。

できる限りの資料を提示して、皆さまのご質問に応えたいと思っています。どうぞお気軽に声を掛けてください。

今回は、郷土ゆかりの質問を紹介します。

レファレンスの例

Q：『伏木築港論』には、藤井能三著と西師意^{もろとも}著がある。なぜ、同時期あたりに2つの築港論があるのか経緯を知りたい。

A：能三は、1891年(明治24)に『伏木築港論』を執筆している。ウラジオストックと航路を結べば、建設を進めているシベリア鉄道を利用して欧州へとつながり、対岸交易ができる。日本海側でウラジオストックとの連絡に最も適している伏木港を開港するべきで、富山県のみならず、北陸全体のためになると述べている。

1892年には、西師意の『伏木築港論』が出版されている。西師意はジャーナリストで『北陸政論』の主筆。『治水論』などがある。『伏木築港論』では、伏木港の重要性を自然・産業・国際情勢などを踏まえ、具体的に述べている。

富山県が伏木港の築港をはじめて建議したのは1884年(明治17)だが、本格的に論じられたのは、1891年(明治24)になってからだった。この年あたりから、伏木では、築港についての会合が連日のようにあったという。伏木町有力者で「伏木築港論相談会」が結成された。

「伏木築港論相談会」が伏木築港の論議を県内に広げるため、北陸政論(当時の地方紙)主筆の西師意に、築港研究の連載を依頼する。1891年12月22日から翌年1月28日まで『伏木築港論』を連載し、1892年単行本にまとめて出版した。

<参考資料>

『伏木港近代史』古岡英明/著 伏木港開運振興会 1973

『藤井能三伝』高岡市立伏木小学校、伏木子ども風土記学校博物館/編 1965

Q：勝興寺の聖徳太子像について何か分れば知りたい。昭和10年頃に本堂に安置されたと聞いている。

A：1935年(昭和10)4月26日の『越中新聞』によると、勝興寺に安置する聖徳太子像(人骨練乾漆)の開眼式が、前日の25日に挙行され、未明より各方面から大勢の人が押し寄せ、大雑踏を呈した。太子像は駅前から、獅子舞を先頭に、500人の稚児、数十名の同行、各種多数が勝興寺へと進んだ。通りには、絵行燈や五色の旗が掲げられ、数万人の人出があった。

『高岡新聞』では、太子像は駅前から税関裏より港町を経て中道、石坂町の一部古国府通りを経て勝興寺本堂に向かい先頭が到着しても、後駆は、まだ駅前に残っていたとある。

『北陸タイムス』では、像の製作者である寺畑助之丞について触れている。伏木出身の彫刻家、東京高等工芸学校助教授の寺畑に、勝興寺住職土山瑞映師が1933年に製作を依頼した。(新聞内容要約)

<参考資料>

『鴻爪集』第29号 田口俵太郎/著 伏木図書館 刊年不明

『高岡の図書館』第37号P2-3 寺畑喜朔/記 高岡市立中央図書館 1997

(横 効子 記)



こんにちは、高岡の地域図書館です！

4つの館の活動をシリーズで順に紹介します。第1回目は、戸出図書館です。

戸出図書館は昭和11年（1936年）、青年団の設置運動により設立された青年団立戸出図書館から始まりました。昭和27年には戸出町図書館設立条例が施行され、戸出町立図書館が誕生しました。現在の戸出町3丁目へ移ったのは昭和61年のことです。以来駐車場を拡充するなど、30余年の間、多くの地域の皆さんにご利用いただいています。ここでは、現在の主な取り組みを紹介します。

戸出児童センターとの連携

隣接する児童センターとは長年にわたり行事を共催しています。毎月のフレンドリータイム訪問では、乳児期から本に親しんでもらうことを目的に、未就園児とその保護者に向けて絵本の読み聞かせを実施しています。ボランティアの協力のもと、夏休み春休みにはストーリーテリングや紙芝居など、バラエティ豊かなおはなし会を開催しています。また、館だよりを相互に掲示するなど協力して情報の共有・発信に努めています。

学校等との連携

中学生の職場体験活動「社会に学ぶ14歳の挑戦」では、毎年戸出中学校の2年生を受け入れています。本の排架や展示の準備から絵本の読み聞かせまで、様々な業務を体験してもらいます。

学童保育へは、読書支援として団体貸出を実施しています。夏休み冬休みには読み聞かせにも伺い、楽しいひとときを過ごしています。

その他、小学校の町探検で訪問された際には、利用案内やクイズなどのオリエンテーションを行い、図書館PRを図っています。今後は学校訪問など、さらなる連携に取り組みます。

中学生が読み聞かせに挑戦します！



「おはなしのろうそく」に火を灯します

地域との連携

戸出地区には昭和60年に発足した「といで婦人読書会」があります。テキストとして使用される県立図書館所蔵資料の仲介を行い、読書会活動を支援しています。

地区の文化祭には、毎年恒例の「本のリサイクル市」で参加しています。図書館の除籍雑誌や利用者から提供いただいたご家庭の本を無償で提供するものです。普段図書館を利用しない方でも気軽に本を手に取りやすく、思わず話に花が咲くなど、地域の皆さんとの貴重な交流の場となっています。

また、町内に色とりどりの七夕飾りが見られる「といで七夕まつり」の時期には、図書館にも願い短冊を設置するなど、地域に根ざした事業実施に取り組んでいます。



リサイクル市は毎年大盛況です

これまでの戸出図書館の取り組みが評価され、令和2年度「子供の読書活動優秀実践図書館」として文部科学大臣表彰を受賞することができました。今後も子どもと本を結びつける活動を推進し、子どもと本にとどまらず、地域の中にあって、誰もが身近に使える図書館づくりに努めます。ぜひお気軽にご利用ください。

(押川 千陽 記)



小矢部川下流左岸五位庄用水の歩み

現在はゆるやかに流れる小矢部川も昔は度々溢水・氾濫を起こしています。原因は、庄川との合流(1912年に完全分離)、流れ込む河川や排水路が多いこと、川の蛇行と言われています。昭和20年代の水害の記録が、福岡町を襲った災害の凄まじさを伝えています。当時の新聞によれば、昭和27年(1952)7月の豪雨の際は、「福岡町付近の稲田養鯉の育子約五百万尾が岸渡河、山王河に流出し被害約百五十万円。」(北日本新聞7月2日付記事引用)と伝えています。

また、昭和28年9月の台風上陸時の記事は、「小舟を出して避難」(北日本新聞9月26日付記事引用)という見出しで、「二十五日午後十時小矢部川の増水とともに堤防決壊の危険にさらされた福岡町では — (略) — 廿六日午前零時遂に荒屋敷三カ所その他一カ所が決壊、濁流は福岡町、荒屋敷、三日市、本領、大滝地内に流れ込み、農家など七百戸が完全に水浸しとなった。」と伝えています。

令和2年6月、「高岡市洪水ハザードマップ」が更新され全戸に配布されたので、お住いの地域のハザードマップはご覧になったことでしょうか。大雨の季節になると、地域の「治水」の状況等が気になることと思います。ここでは、小矢部川下流左岸の治水の歩みを五位庄用水路の開削、補修を中心にまとめます。

五位庄用水の開削

小矢部川左岸の西山の麓に古くから村落があり荘園に編成されたことから「五位庄」と呼ばれていました。加賀藩の治世となるまで、五位庄のかんがい用水は、「山根筋しみ出水」とため池に頼っていました。加賀藩政時代に農業振興策がとられ、生産拡大のために安定したかんがい用水確保が必要となり、小矢部川から取水する用水路開削を願い出たものと考えられています。水争いは各地で見られますが、五位庄用水開削の時も紛争が起こり、その記録から1681(延宝9)年に開削が始まったとされています。開削により干ばつ被害が減少し、増産につながっています。

1864(元治1)年には、国吉組6カ村の再三の願い出によって水路の延長・拡幅工事が始まり、1867(慶応3)年に完成しています。全長は3478間(約6330m)から4854間(約8834m)に延長となりました。その際関係諸村19カ村で五位庄用水管理規定書が作成されています。

昭和の改修

小矢部川下流左岸の地域では用水路と排水路が平面交差しているうえ、小矢部川に注ぐ河川の水路は屈曲

し、断面が狭小であったため排水路として十分な流下能力がなかったといえます。また、簡易な草堰を設けて水を取り入れていたため、出水の度に堰は流失し、用水路の堤を決壊し、小矢部川の逆流水も加わって一面湖面状態になることもありました。その一方で、しらかきや夏期には、しばしば干ばつの被害も起きていました。これらのかんがい・排水の欠陥を解消するため、五位庄・土屋・三日市が合併統合し、木工沈床による床止め工事を行い、三用水の合口取入堰が昭和24年に完成したのです。

ところが、並行して進められていた小矢部川改修工事等により、年々小矢部川の河床が低下し、取水困難となりました。そこで、昭和27年、五位庄用水・下八ヶ用水・佐加野用水土地改良区において小矢部川下流左岸用排水改良事業(県営)が着工となり、14年かけ完成に至ったのです。五位庄用水における主な工事は、五位庄用水頭首工の改修、用水路のブロック積み護岸及びコンクリート水路への改修、用水路と交差する西明寺川下をサイホンとすることでした。

平成の大改修

昭和の改修以後30年~40年経過すると、老朽化、亀裂の発生、ブロックの崩壊等が発生し、用水量の確保や維持管理に多大な経費を要するようになりました。また、都市化の進展によって都市部では溢水被害が発生していました。その対策として護岸の堅牢化、通水能力の増大を図るために再改修が行われることとなりました。

五位庄地区は平成13年度(2001)に着工し、平成22年に完成しています。その工事の目的は、「用水改良の他に、消流雪、防火施設、洗い場を設け、用水の総合機能を高める」とされ、食料生産の基礎としての役割に加え、生活用水、防火用水、消流雪用水などの地域用水機能を有するものとなったのです。

<参考資料>

『北日本新聞』、
『福岡町史』、『県営 小矢部川下流左岸用排水改良事業 事業誌』、
『土地改良50年のあゆみ』、『小矢部川』、

『万葉の豊かな水の里小矢部川下流左岸用水』

五位庄頭首工

(村本 雅美 記)



お知らせ



行事予定

中央図書館

- えほんのじかん 毎週火～金曜日
(休日を除く)
午前11時～15分程度
- えほんの広場 毎週土、日曜日、休日
午前11時～30分程度
- 土曜おはなし会 午後2時～2時30分
第1土曜日 高岡おはなしの会
第2土曜日 図書館ボランティア
第3土曜日 チルドレンズシアター
(高岡第一学園
幼稚園教諭・保育士養成所／年4回)
- 第4土曜日 人形劇団どんぐりコロコロ
第5土曜日 劇団「喜び」
- 高岡婦人読書会 毎月第3水曜日 午後2時～
「古文書を学ぶ会」 10月17日(土)
午前10時～11時30分(受講受付締め切りました)

伏木図書館

- こども読み聞かせ会 毎週土曜日 午前11時～
古典の会 毎月第2日曜日 午前10時～
読書会 毎月第3土曜日 午後1時30分～

戸出図書館

- こども読み聞かせ会 毎週土曜日 午前11時～

中田図書館

- 子ども読み聞かせ会 毎週土曜日
午前10時30分～

福岡図書館

- おはなしの部屋(読み聞かせ等) 毎週土曜日
午前11時～

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、上記の内容が中止・延期となる場合があります。

最新の実施状況は、図書館のホームページを確認するか、お電話などでお問合せ下さい。

令和2年度 中央図書館の主な活動を紹介します

〔古文書関係の事業〕

○古文書解説事業

中央図書館所蔵の古文書を解説し、『高岡市史料集』として発刊します。

○古文書を学ぶ会

中央図書館所蔵の古文書をテキストとして、近世の高岡の様子を学びます。今年度は、「安政二年江戸表大地震開書」を取り上げ、年4回開催します。

○高岡市史料集解説講座

11月21日(土)に開催予定。毎年3月発刊の『高岡市史料集』の解説文に基づき解説します。「市民と市政」11月号などをご覧ください。



講演会「子どもと読書」の開催

～子どもと本の架け橋をめざして～

講師:小関知子((公財)東京子ども図書館常務理事)

日時:令和2年10月3日(土) 10時～12時

場所:高岡市生涯学習センター4階大ホール

(ウイング・ウイング高岡)

幼児期からの読書週間が子供の人生に大きな影響を与えます。

講演の内容を家庭・地域での実践や読み聞かせに是非お役立てください。

〔学校との連携事業〕

子どもの読書活動推進の一環として、高岡市内の小・中・義務教育学校、特別支援学校との連携を更に進め、次の事業を展開しています。

○わくわくブックトーク

図書館職員とボランティア会員が小学校等を訪問し、低学年の児童を対象にブックトークを実施します。

○図書館招待事業

児童を中央図書館に招待し、施設の機能や使い方について説明します。

○ふるさと高岡巡回文庫

高岡ゆかりの人物の関連図書を小学校等に巡回させ、ふるさと高岡への愛着心を育みます。

○学校における個人貸出

これまでの団体貸出に加え、児童や教員が学校図書館を通じて中央図書館の本を借りられるようにします。

高峰譲吉博士のコーナーを常設します

高岡市出身の偉人、高峰譲吉博士について紹介するコーナーを11月上旬に設置します。貴重な資料を紹介します。どうぞ、お楽しみに。

高岡市立中央図書館 〒933-0023 末広町1-7
高岡市立伏木図書館 〒933-0104 伏木湊町13-1
高岡市立戸出図書館 〒939-1104 戸出町3-19-29
高岡市立中田図書館 〒939-1272 下麻生1108
高岡市立福岡図書館 〒939-0132 福岡町大滝44

TEL (0766) 20-1818 FAX (0766) 20-1819
TEL (0766) 44-0073 FAX (0766) 44-0073
TEL (0766) 63-1254 FAX (0766) 63-1254
TEL (0766) 36-0054 FAX (0766) 36-0054
TEL (0766) 64-1034 FAX (0766) 64-1038